論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　WICKING Paul David

論　文　題　目

Learning-oriented assessment as contextually grounded practice in Japanese higher education: The case of EFL
(日本の高等教育という文脈に根差した学習指向評価：EFL の事例)

論文審査担当者

主　査	名古屋大学	教授	木下　徹
委員	名古屋大学	教授	内田綾子
委員	名古屋大学	教授	高井次郎
			（教育発達科学研究科）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

I. 論文の概要と構成

本論文は、日本における高等教育の持つ社会的、文化的、教育的状況を念頭においた「学習指向評価」（Learning-oriented assessment、LOA）について、大学レベルでの外国語としての英語（EFL）を事例研究の対象として、量的研究方法と質的研究方法を併用して、その現状の把握と可能性を探求したものである。具体的には、(1) LOA 及び一般の評価についての教員の持つ信念と教育現場での実践、(2)評価についての学生側の概念と経験、(3)上記課題に関連する社会的、文化的状況等の諸点について、インタビュー、質問紙法等により収集したデータを、因子分析、データマイニング，ナラティブフレームワーク他の、量的アプローチと質的アプローチを駆使して解明すること、および、それに基づき、より生産的で効率的な学習結果を目指した LOA を中心した提案と示唆を行うことも試みている。

本研究は、第 1 章の「序論」から、第 8 章の「結論」までの 8 つの章と、引用文献リスト、及び、7 種類の巻末資料により構成されている。まず，序論では、背景、本研究の目的と意義、研究課題、及び、learning, assessment, contextually grounded practice　という、本研究で使用する 3 つの主要な用語の定義が記述されている。序論に続く第 2 章では、教員と学生の assessment に関する belief を含む、本論の中核をなすキー概念の定義と、authentic assessment, dynamic assessment をはじめとする 6 つの assessment を中心とした、広義の形成的評価（formative assessment）に関連する先行研究を概観している。次の第 3 章は、高等教育を中心とした場合の日本の文脈に関わりの深い諸問題を、(1)社会・文化的視点、(2)理論的枠組みとしての学習指向評価という 2 つの視点を中心に、関連する先行研究を総括的に検討している。さらに、その様な先行研究の把握と現状分析に基づき、章末では、本研究の目的と研究課題を提示している。

第 4 章は、方法論の章で、まず、本研究で使用する方法の哲学的・理論的基礎の解説から入り、質的分析と量的分析を併用した本研究でのリサーチデザイン、Carless(2014)を用いた LOA の 3 つの原理とその概念的枠組み、および、本研究と関連する事例研究の伝統的アプローチとその長所・短所等について説明した後、データ収集と分析、測定手段等について詳述している。第 5 章と 6 章は結果の章で、前者では、学習者を対象にした調査から、学生の持つ、評価についての概念と経験を記述し、後者では、教師に対する調査から、評価に関する信念と教育現場における現状について報告している。さらに、第 7 章では 5、6 章で明らかにした結果に依拠して、本研究の研究課題に関する検討と考察を加えている。最後に第 8 章で研究全体を総括している。

第 5 章から始まる結果と考察について、主要部を要約すると以下の様になる。まず、本研究の知見の 1 つとして、本研究の対象となった日本の大学での EFL に従事する教師の多くは、(A)評価に関する信念と教育の実践は緊密に連携している、(B)評価はそれ自体で、学習者に有益な学習体験を提供しているといった考えを支持している一方、少なくとも、学期の

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

開始時点では、どのように評価するかについて明確な考えを欠いている傾向があると報告している。また、学習者が評価というものについて抱いている概念と実際の経験については、全体として、評価は建設的でポジティブな学習結果に結びつくとしており、評価の結果も、能力や到達度に関する信頼出来る指標として捉えている。他方、良い評価や成績を取ることは質問紙による回答からは、社会的な向上や、よりよい就職に繋がるといった信念が窺えるのに対して、インタビューからは、心理的満足は得られるが、就業上等の影響は少ないとみられているとしている。さらに、日本の高等教育の経緯と現状を踏まえた LOA という視点からは、評価課題の現実性、明確な評価基準、評価方法の多様性、及び、学習者の相互評価力と自己評価力等といった、先行研究が LOA を促進するとしてきた多くの要素が、本研究でも教師と学習者の双方から支持されたとしている。その一方、先行研究と異なり、（教師側の）事前の計画性と（学習者の）高い自己評価の形成は重要とは認識されなかったとしている。

II. 評価

本論文は積極的に評価すべき点として以下の諸点を挙げることができる。

(1) 近年その重要性を高めているにも関わらず、日本の斯界、特に大学での外国語教育としての英語教育の分野ではまだ十分な調査・研究がなされていない Learning-oriented という視点からのアセスメントについて、周到な準備に基づいて、量的調査と質的調査を丁寧に行い、分析を行っている。

(2) 英語母語話者と非母語話者、常勤講師と非常勤講師等々の属性のバランスに配慮した総数 148 名にのぼる教員側と、東海地区を中心とした 8 大学、有効回答数 550 名を超える学生側の、双方に対して、調査を十分に行っている。

(3) これまで比較的よく測定手段として用いられてきた質問紙とインタビューという方法によって得られたデータだけでなく、教員の行う各種の定期試験、シラバス、カリキュラムといった、従来分析の対象とされることの少なかった資料も対象としている。また、この様な点からも、結論の一般化に貢献する triangulation につとめている。

(4) 因子分析とデータマイニング等による情報の縮約と発掘に関するスキルを使用することで、得られたデータを効率よく分析しており、かつ、綿密に解釈を行っている。

(5) 学習達成度の評価とそのフィードバックの有用性について、従来より多角的なアプローチをしている。

(6) 英語学習者に対するフィードバックの効果について、これまで必ずしも十分に検討され

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

ていなかった点に考察を加えている。

(7) 今回の研究結果から、LOA について、海外を中心とした実践から目指すべきとされてきた性質について、我が国での有効な部分を確認するとともに、少なくともその一部については疑問の余地のある可能性を示唆している。

但し、本論文は、次の様な、改善の可能性のある点も含んでいる。

(1) 学習者のおかれている教育文化の議論が、主として東アジアの「儒教文化」の一本に絞られているが、その他にも多数の説明枠組みがあるにも関わらず、それらについての言及がない。

(2) 研究の分析単位が単独で検討されているが、それぞれのダイナミックスをとらえる方法も検討できた可能性がある。

(3) 海外で利用された測定尺度の文化的等価性が確認されておらず、我が国の状況への適応の有効性に限界がないとは言い切れない。

(4) 今後、我が国では大学入試改革との関連もあり、TOEFL,TOEIC, IELTS などの英語検定試験がより重視されることが予想される中で、大学を中心とした英語の授業において学習指向評価をどのように取り入れられるかという点に関する考察は、もう少し発展させてもよかったかもしれない。

(5) データのコード化について、今回は、筆者自らが、１回目と２回目の間隔を十分取って、２度行うことで、評定者内信頼性の確保に努力しているが、独立した評定者を用いて、評定者間信頼性も提示することで、全体としての信頼性をより向上させられる可能性がある。

(6) 本研究は元々ケーススタディとして自己規定しているが、学習者に対する質問紙調査の部分については、全国の大学に関する網羅的なリストを利用するなどして、対象の選択における無作為性を高める工夫の余地はあった可能性がある。

以上のような、なお、改善すべき点はあるが、それらは、本論文の価値を著しく損ねるわけではない。また、その一部は筆者も本研究の限界および今後の課題として、ある程度言及している。従って、将来、筆者自身による改善も充分期待できる。

総合的に判断して、本研究は博士の学位を認定するべき要件を十分備えていると思われる。